

## ベン・ディトステイ (Ben Di Tosti)

アメリカン・ジャズの歴史において数多くの無名で偉大なミュージシャンが存在していた。残念ながらそれらの人たちはほんのわずかな人たちからしか知られず、また評価されていなかったという事実がある。その中で以前から注目していた大変優秀な、しかしながら無名のジャズ・ピアニストに会えるという幸運を筆者は手にしたのである。しかもその人の奥さんとは仕事を通じて何年も前から面識があったというのに、この偉大なジャズ・ピアニストと結婚しているとは知らなかったのである。ワールド・パシフィック・レーベルからリリースされたベン・ディトステイ・トリオの『カーニヴァル』というアルバムを60年代後半に聴いて大変驚かされた。ピアニストの弾くラヴェルやドビュッシーなどの印象派を思い浮かべるメロディ・アプローチとジャズ・アドリブに対位法をいれたその斬新なスタイルは、当時ビル・エヴァンスやハービー・ハンコックばかり聴いていた耳には強烈な印象を受けたのである。そして長年インタヴューをしたかったベン・ディトステイとようやく連絡が付きインタヴューまで辿り着いたのである。(妙中俊哉)



——簡単な略歴からお願いできますか？

ベン 私はニューヨークのロングアイランドに生まれてそこで育ちました。

私のおばはピアノ教師で当時私の家族と住んでいたの彼女に幼少の頃からピアノ・レッスンを受けてきました。もちろんクラシック音楽でした。でも当時はラジオでジャズが多く流れている時代でしたので、ラジオで聴くジャズ・ピアノに魅せられました。それでジャズ・ピアノは独学で勉強しましたが後にピアニストのレニー・トリスターノからレッスンを受けるようになりました。

——なぜレニー・トリスターノからレッスンを受けようと思ったのですか？

ベン そうですね、トリスターノの教え方の素晴らしさを耳にしていたからです。また彼は私の好きなピアニストでもあったからです。

——すでにその時点で、ジャズ・ピアニストとしてやっつこうと決めていたのですか？

ベン はい。そして当時はシリナー・ハウスと呼ばれていましたが、今のパークリー音楽大学に進学したのです。1年後に空軍に入隊しました。そこで空軍楽隊においてピアノを弾いていました。除隊後にテキサス大学で音楽の勉強をしました。卒業後は、ロサンゼルスにある南カリフォルニア

大学の大学院に進みました。そこに当時いたハルジー・ステープンス教授という作曲家としても知られている人について学びたかったからです。彼は「ベラ・バルトークの人生と音楽」という本の著者でもありました。専攻は作曲科で修士号を取得しました。その時期に映画音楽を手掛けたり自分のトリオで演奏したりするようになりました。——通常は誰かのバンドに入ってサイドマンとして仕事をしばらくした後、独立して自分のグループを持つといったことが多いですが、あなたの活動においてはほとんどサイドマンとしてのクレジットをアルバムに見かけませんね。

ベン 私自身のピアニストとしての仕事ですが、多くはプライベート・パーティにおける演奏活動が多く、いわゆるジャズ・クラブなどで演奏する典型的なジャズ・サークルの中に入らなかったことが理由だと思います。これに関してはちょっと後悔していますが、今振り返ってみるとこういったような有名クライアントのパーティにおいて他の優れたミュージシャンたちとの共演もあったので私は満足していますよ。

——それでベン・ディトステイという名前があまりジャズ・クラブの宣伝に載らなかったのですか。

ベン その通りです。先ほども言いましたようにソロとかトリオでの演奏活動のほとんどはこういったプライベート・パーティでの仕事だったので